行田の神々㉗

伊奈利神社（利田）

第61話

国道一七号バイパス渡柳交差点を東に折れた近くに鎮座しています。江戸時代には、社名に稲荷の字を用いていましたが、明治以降「伊奈利」をあてたようです。

祭神は『古事記』に出てくる「宇迦之御魂命」。この神についてはこれまで数回にわたり書いてきましたように、『日本書記』では「倉稲魂命」と出てくる神と同じで、稲の穀霊を神格化したもので、農耕生産の守護神として信仰されてきたものです。

やがて、貨幣経済が発展すると、農耕生産の神から商業・殖産興業の神へと広がり、五穀豊穣、商売繁盛の神様として全国で最も多く祭られている稲荷社の主祭神として祭られるようになりました。

こうしたお稲荷さんと呼ばれる稲荷社の総本家は京都の伏見稲荷大社ですが、そもそもは、背後の稲荷山を神奈備とする古代の山の信仰から始まったとされ、当地に居住した秦氏によって祭られていたものです。

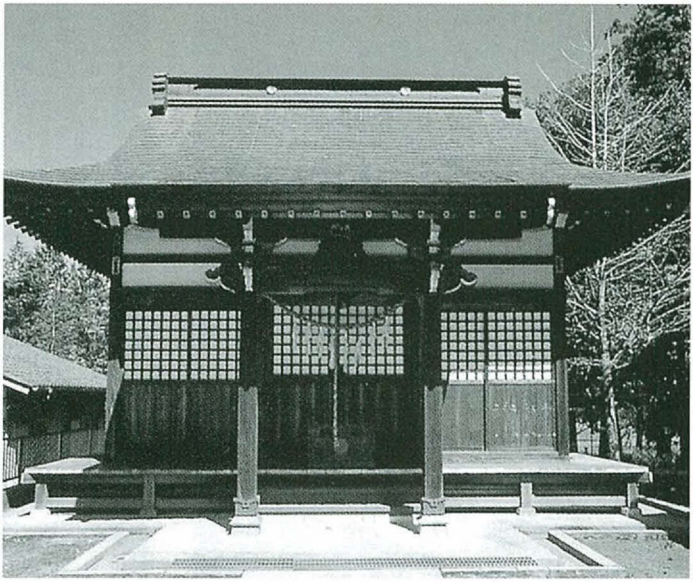
秦氏は、古代朝鮮半島にあった百済から来た一族といわれ、養蚕や機織りの新しい技術を伝えており、早くから稲荷の大神を養蚕の神として信仰していたといいます。

利田の伊奈利社も、かつて養蚕の神として多くの養蚕講が作られ、近郷近在の人々が参詣に訪れていました。神社からは養蚕守護の神札とともにお稲荷様といわれる陶製の眷属像が配られていました。

行田の神々㉘

常世岐姫神社（渡柳）

第62話



さきたま古墳群の南、コルコート株式会社埼玉第一工場に接して鎮座しています。

当社は、もともとは八王子大権現と称し、修験の万法院が別当となっていましたが、明治になり現在の社名に改めたといいます。ですから祭神も常世岐姫命ですが、なぜ八王子大権現から常世岐姫神社に改めたのか、その理由は不明です。

同じ名前の神社は荒木の八王子、見沼中学校の西側にもあります。ここでもやはり八王子権現宮から常世岐姫神社に改めたといいます。八王子は、天照大神とスサノオノミコトとの誓約の時に出現した五男三女の八人の神々ですが、三人の女神に常世岐姫の名前はありません。ですからなぜ常世岐姫なのかはっきりとしていないのが現状です。

『新編武蔵風土記稿』によれば、渡柳の常世岐姫神社の末社として渡柳弥五郎を祭った八幡社（弥五郎八幡）が記載されていますが、現在はどこにあるかわかっていません。

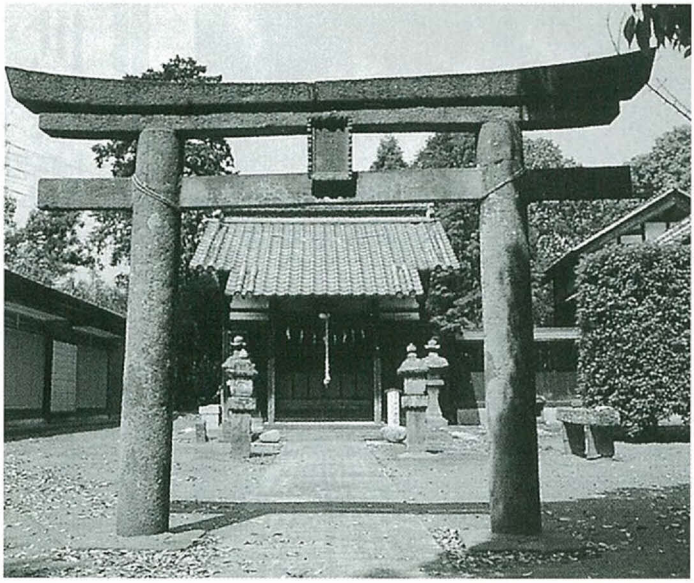
渡柳の地名を姓に持つ渡柳弥五郎は、中世の源氏と平氏の戦いを描いた『源平盛衰記』にその名が出てくる人物です。

渡柳弥五郎が住んだ館の場所は、神社から少し南にさがったやなぎ幼稚園の近くで行われた昔の発掘調査で、南北方向に幅の広い堀の一部が発見されており、これが渡柳氏の館の堀の一部と考えられています

行田の神々㉙

下忍（しもおし）神社（下忍）

第63話



市立下忍小学校の西側に鎮座しています。当社の始まりについては明らかでありませんが、地元では「ひさいずさま」と呼んでいるように、元々は久伊豆神社であったようです。

『新編武蔵風土記稿』には、「久伊豆社　村の鎮守とす明光寺持」とあります。

明治の神仏分離により寺の管理を離れるとともに、周辺にあった高畑の塞神社、東谷の天神社を合祀し、社号も下忍神社に改めたと言います。さらに京田の山神社、高畑の琴平神社を合祀し現在に至っています。

下忍神社に行くと本殿の北側にもう一つ別の本殿が並んでいます。これが合祀された琴平神社です。琴平神社には、「弘化四年開眼供養」と墨書された金比羅権現像が安置されています。

かつての下忍村は、現在の下忍よりも広く、昭和三一年に行田市と合併した地域と吹上町と合併した地域にわかれました。

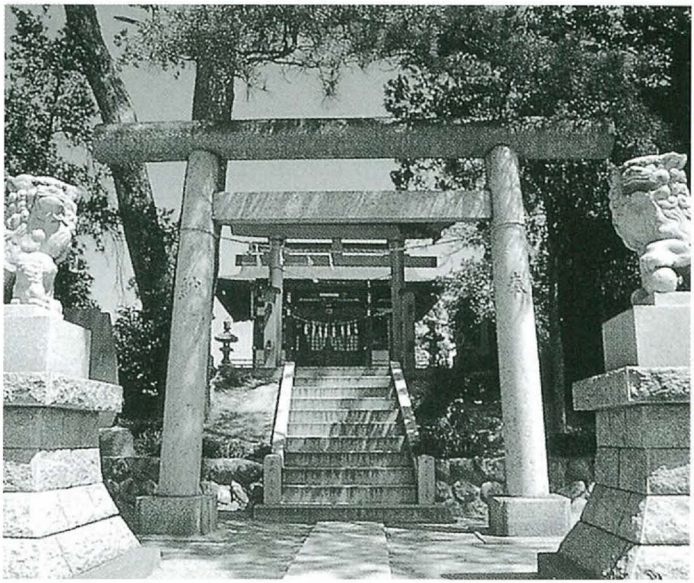
そもそも下忍という地名の由来については、『新編武蔵風土記稿』に「下ト分チ唱フルハ忍城ニ対シテ云ナルヘシ」とあるように、下は上（忍城）に対するものであると言われています。

当地に本拠をおいたと思われる武蔵武士に、『吾妻鏡』にみえる忍三郎・五郎。忍城主成田家の分限帳に下忍主殿や小字の清水に関係すると思われる清水姓の武士が載せられています。

行田の神々㉚

鷺栖神社（門井町）

第64話



太井公民館の東に隣接した、少し小高い所に鎮座しています。

最初は神明社でしたが、やがて鷺が飛来し巣を作るようになったので、棚田の鷺明神社から分霊し鷺宮大明神と称し、江戸時代の初期に社殿を建立したといわれています。

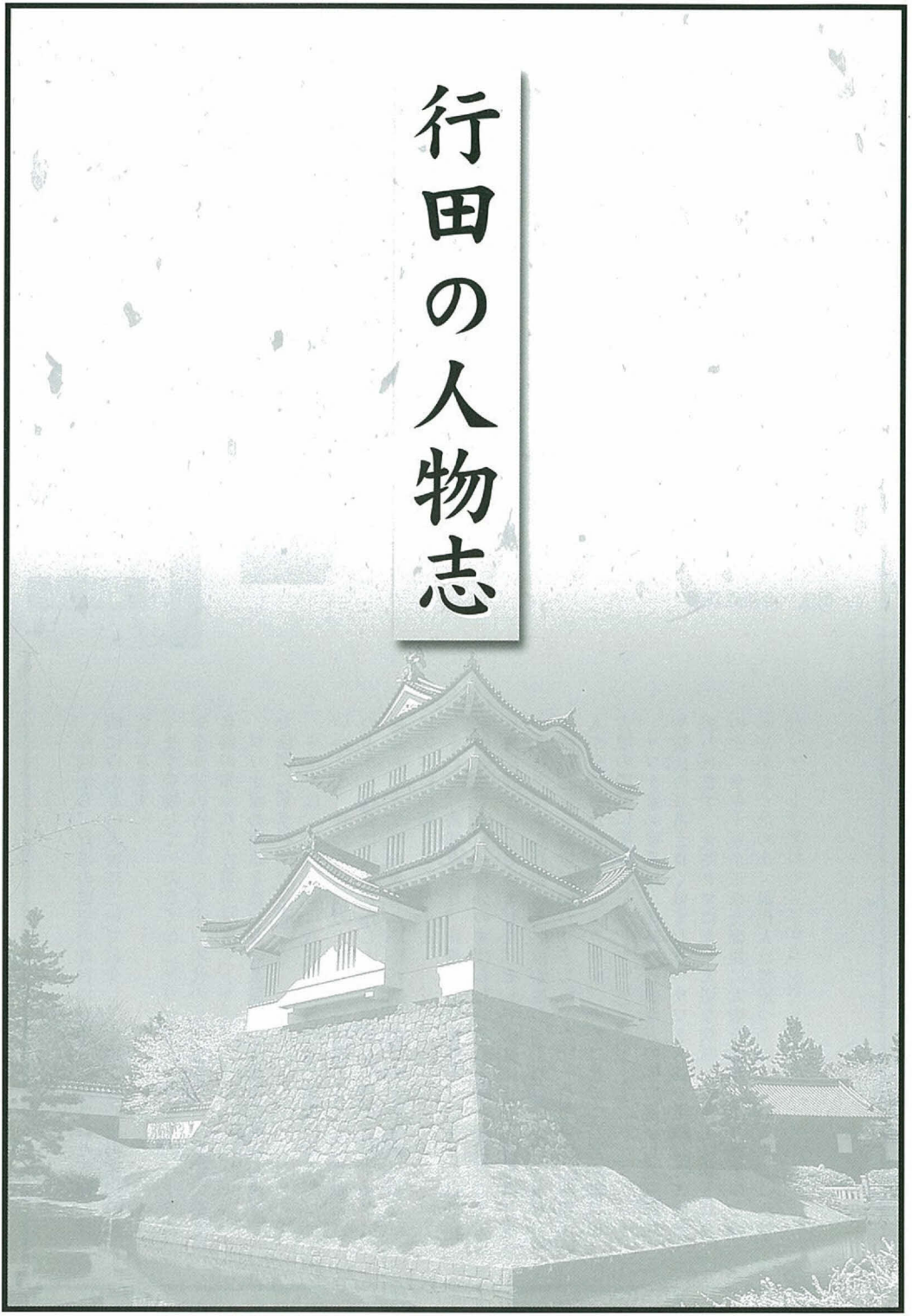
主祭神は日本武尊で、農耕・治水の神として厚い信仰を集めていました。それは神社の周辺は、かつて荒川が大きく蛇行していた所で、砂畠・砂原・深水・押出などの名称が残されているように、頻繁に荒川の水害を受けてきたことによります。

神社がある小高い場所は、蛇行する荒川の堤の一部で、天正十八年の石田三成らによる忍城水攻めの際に築かれた石田堤の一部でもあるといわれます。石田堤はもう少し西側に延び棚田あたりで終わるようです。

『新編武蔵風土記稿』によれば、江戸時代の正徳二年（一七一二）に大井村を新宿（現在吹上町）、太井（現在熊谷市）、棚田、門井の四地区に分け、大井四ケ村と称するようになったといいます。

門井の地名は古く、日光市輪王寺蔵の大般若経第一巻奥書に「武蔵国崎西郡門井郷……応永三年（一三九六）十月十八日頓写」と出てきます。また、門井の栗原家に伝わる戦国時代の忍城主成田氏長の判物に、栗原家の祖先である栗原大学助に、門井の田畑の一部が与えられたことが書かれています

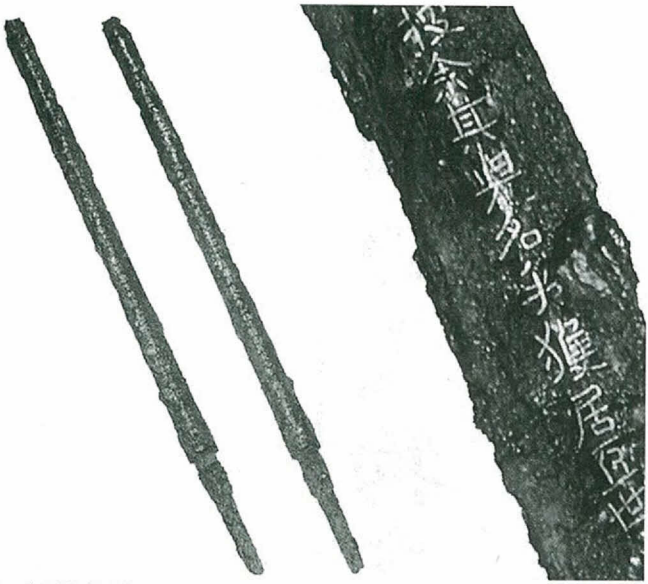
行田の人物志



行田の人物志①

ヲワケ

第65話



国宝　金錯銘鉄剣

今回から、行田の歴史の舞台に登場し活躍された人物や行田にゆかりの人物について紹介し、人物から行田の歴史を見ていきます。

まず登場していただくのはヲワケです。今から約一千五百年余り前の古代人ですが、現代の行田であるいは全国で最も名前の知られた人物ではないでしょうか。

ヲワケ家の家系と彼自身の業績は、稲荷山古墳から出土した鉄剣に刻まれています。

ヲワケは、彼の家では八代目にあたり、初代はオオヒコといいます。彼の家は杖刀人の首（おびと）、言い換えると近衛兵の長官のような役職に代々就任し大王を補佐してきました。ヲワケ自身もワカタケル大王（雄略天皇）が日本全国を統一する際に大いに活躍しました。

そこで、鉄剣を作り、鉄剣に文字を刻み、こうした自分の家の家系や家柄、自分のすばらしい功績を遥かな後世にまで永遠に残そうと考えました。そして現実に一千五百年余り後のサキタマから行田へと名前が変わった現代の行田の人々にも彼の名前と業績が伝わりました。ただ一つだけ私たち現代人が分からないことがあります。それはヲワケ自身が稲荷山古墳の横穴に埋葬されているのかどうかです。

ヲワケ家の家系は、当時の近畿地方の都で活躍した阿部氏や膳氏（かしわで）の家系と良く似ており、ヲワケも都で活躍した人物と思われます。サキタマに来て大切な鉄剣とともに葬られたのか、サキタマから来た豪族に大切な鉄剣を譲り渡すほどの喜びがあったのか、現代人は判断つきかねています。これはヲワケにも予想外のことかもしれません。

行田の人物志②

高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）

第66話

虫麻呂ゆかりの地　小埼沼

虫麻呂は奈良時代の歌人で、行田の出身ではありませんが、万葉集に載せられた、私たちに馴染み深い、小埼沼の鴨の歌の作者です。

ピィーンと冷たく張りつめた早朝の小埼沼は、見渡す限り白い霜の世界に包まれていた。その中でかすかに羽を動かす鴨はまるで自分の羽に降り積もった霜を払うようなしぐさに見える。歌のおおよその意味です。

虫麻呂の細かい経歴は不明ですが、天平四年（七三二）藤原不比等の子宇合が西海道節度使に任命された時、虫麻呂は都で宇合を送る歌を残しています。常陸国の国守として赴任した藤原宇合の従者だったとも。また、もともと常陸在住の身分の低い役人であったが、歌の才能を宇合に見いだされ、『常陸国風土記』の編纂に関与したともいわれています。

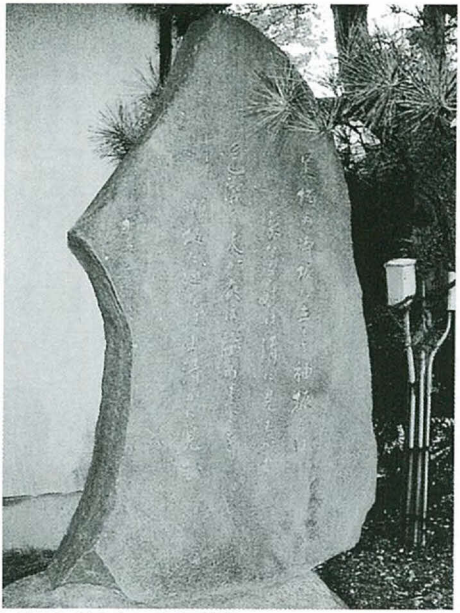
虫麻呂の歌の才能は豊かで、その作品の多くが万葉集に載せられています。長歌一四首短歌一九首、施頭歌一首で、伝説を素材にした歌が多く、ほとんどが『高橋連虫麻呂歌集』からのものです。小埼沼の鴨の歌もこの歌集から万葉集にとられたものです。

どんないきさつから虫麻呂が小埼沼の鴨を歌ったのか記録はありませんが、小埼沼の近くにあった郡衙（郡の役所）に仕事で宿泊した翌朝、霜に覆われた小埼沼を見て作ったとも考えられています。いずれにしても才能豊かな歌人をも感動させた冬の小埼沼の風景とはどんなものであったか見てみたい気がします。

等母麻呂（ともまろ）・刀自売（とじめ）夫妻

第67話

足柄のみ坂に立して袖ふらば
いはなる妹はさやに見るかも
色深く背なが衣は染めましを
み坂たばらばまさやかに見む



八幡山公園内にある歌碑

万葉集の防人（さきもり）歌の中に埼玉郡の夫妻が唱和した作品が載せられています。

防人として西にむかう途中の足柄峠で、古里の方に向かって手を振ったならば妻に良く見えるだろうか。との夫の問いかけに、もっと夫の衣を濃く染めておけば良かった、そうすればもっと良く見えただろうに。と妻が答えた歌です。

防人として生きて帰れる保証のない旅に出た夫と見送る妻。衣の色に託された惜別の気持ちが伝わってきます。天平勝宝七年（七五五）二月に献上された歌の一つで、今からおよそ一二四〇年余り前の作品です。

埼玉郡上丁（かみつよほろ）藤原部等母麻呂、物部（もののべ）刀自売が二人の名前ですが、上丁の丁は兵士を意味し防人軍団の編成上の階級を示しているといいます。藤原部は允恭（いんぎょう）天皇の妃（きさき）、物部は物部氏にゆかりのある名前であり、また、夫婦別姓であったことも知ることができます。

防人は、唐や朝鮮半島にあった新羅の日本侵入を想定し、その防衛のために北九州地方に配置された兵のことで、最初は諸国の兵士の中から一定数を3年交替で選んでいましたが、天平二年（七三〇）東国の兵士に限るようになりましたから、等母麻呂の時代には、彼だけでなく、彼の住む周りからも多くの若者が防人として北九州地方に派遣されました。

行田の人物志④

円澄（えんちょう）

第68話

円澄生誕の地の碑

円澄は、武蔵国埼玉郡出身の天台宗の僧侶で、宝亀三年（七七二）に生まれ、俗姓は壬生氏。十八歳の時、唐の僧鑑真の高弟道忠の弟子となりました。道忠は、東国に下り伝法利生活動を行い、多くの弟子を養成しましが、この道忠一門と天台宗の最澄一門とが結びつき、東国に天台宗の教線が拡大されました。現在でも群馬・栃木や埼玉をはじめとして関東・東北地方に天台宗の古刹が多いのはこのためだといわれています。

こうした中で道忠一門であった円澄は、延暦十七年（七九八）二十七歳の時比叡山に登り最澄の門に入り、最澄とともに、天台宗の発展に尽力し、ついには、初代天台座主最澄に続き、天長十年（八三三）第二代座主に補せられ、承和四年（八三七・一説には天長十年）六十六で没したと伝えられています。

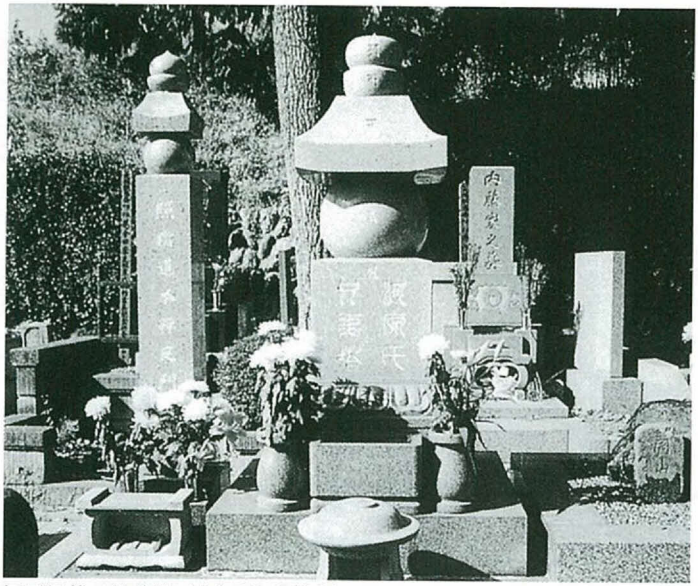
鎌倉時代の書『元亨釈書』に、夢の中で白い蓮の花が咲き円澄を身ごもったという話が載せられています。埼玉郡のどこで生まれたかについては、明確な記録はありませんが、円澄が活躍した九世紀、埼玉郡内に旧盛徳寺が下埼玉に創建されます。

この創建時の瓦は、道忠一門が活躍した群馬地方の瓦と良く似ていることが指摘されています。平成9年さきたま史跡探訪会により、円澄生誕の地の碑が現在の盛徳寺の門前に建立されました。

行田の人物志⑤

河原兄弟

第69話



河原兄弟の供養塔（北河原・照岩寺）

河原兄弟は、兄・河原太郎高直と弟・次郎盛直（一説には忠家）といい、平安時代末の寿永三年（一一八四）、源平一の谷の合戦生田の森（現在の神戸市）の戦いで源氏方の先陣の功をたて、壮絶な戦死を遂げた活躍が『平家物語』巻九、二度之懸の条前半部に記述されています。河原氏のように小さな領地しか持たない武士は、合戦において自ら戦い手柄をたてなければ、領地を増やす機会がないとして、平家の陣にたった二人で真っ先に討ち入り、武蔵武士の勇敢さを示したものとしてたたえられました。

これまで兄弟については、兄が南河原、弟が北河原を支配し、兄が南河原の観福寺、弟が北河原の照岩寺を菩提寺とするといわれてきました。

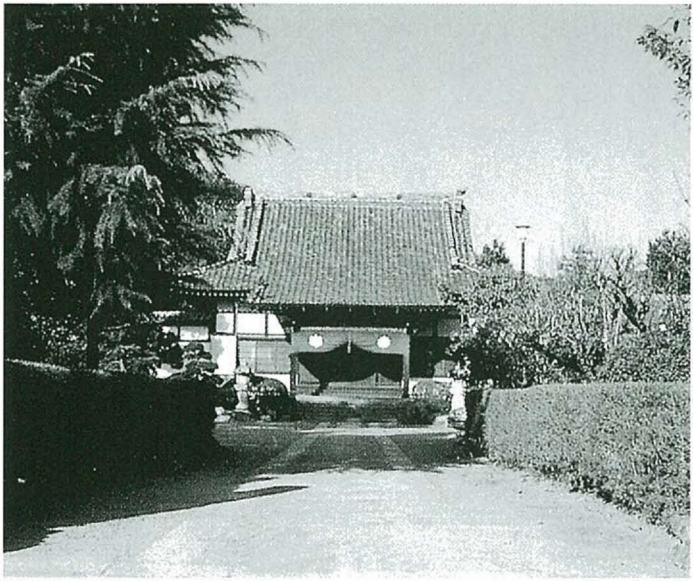
平成二年南河原文化会により刊行された『源平合戦の勇士　河原兄弟』に、河原郷が兄弟の時代に南北河原に分かれていないこと。兄弟が一族の菩提寺として建立した寺が照岩寺で、観福寺が兄の菩提を弔う寺といわれるのは、南北河原に分かれてから以後のものと研究の成果が紹介されています。

照岩寺では、昭和六二年現住職の晋山式にあわせ、河原氏の菩提寺として、兄弟の八百年、中興開山の六百年を記念し河原氏兄弟塔と家臣森和泉入道道本の供養塔を建立しました。

行田の人物志⑥

成田長泰（ながやす）

第70話



龍淵寺（熊谷市）

忍城を築城した成田氏の中から、戦国の争乱を戦い抜いた長泰と、水攻めを受け忍城を開城した氏長（うじなが）親子を紹介します。

長泰の時代は、関東全体の支配を狙う小田原城の北条氏康（うじやす）と関東進出を目指す越後の長尾景虎（かげとら）（後の上杉謙信。以下謙信とする）との戦いの最前線に忍城は位置していました。

長泰は最初北条氏に属していましたが、永録三年（一五六〇）謙信の関東出兵に際して謙信に屈服し、小田原城を攻めています。この戦いの中で謙信が鎌倉八幡宮に参詣した折り、長泰は成田家のしきたりとして下馬して迎えず謙信の怒りを買い、謙信は長泰を馬から引き下ろしたといわれています。長泰は再び謙信から離反し北条氏に属することになり、謙信は、すかさず羽生城を奪い、さらに忍城の喉元である皿尾に砦を築きました。長泰は羽生城の奪還に手間取り、氏長の奮戦によりようやく奪い返すことができましたが、この頃から子氏長との間が不和となり、ついには氏長が父長泰を城から追放する事態とりました。この父と子の争いに北条氏が介入するに及び、同様に子が父を城から追放した岩付城がやがて北条氏に支配された例もあり、長泰はこれを断り、菩提寺である熊谷・龍淵寺に隠居し家督を氏長に譲ったといいます。